

教育実習生の実習の前後における 実習への意識の変化について（その2）

—教員免許状取得が卒業要件となっていないコースの学生について—

The Difference of The University Students' Feelings Toward Teaching
Training Before and After Teaching Training

—Focussing The University Students of Non-prospective Teacher Courses—

今井敏博（和歌山大学教育学部）

Toshihiro IMAI

本研究では、教育学部の教員免許状の取得を卒業要件とされていないコースの学生で、教員免許状の取得を希望する者が、教育実習を経験することにより、教育実習への意識がどのように変化するかを昨年と同様に調べた。

意識調査から、全体的にみて、教育実習を楽しく感じ、意欲的に取り組むことができた実習生が昨年同様に多かった。また、教育実習を経験することにより、自らの教員への適性を見出すことができた学生や、教職への進路志望を強めた学生が多いことも昨年と同じ傾向であった。教育実習は、学生が教職への適性や教職への進路決定への重要な機会となっていると思われる。特に、教員免許状取得が卒業要件でない学生にとって、その傾向が強いのではないかと考える。

キーワード：教育実習、教職への適性、教職志望

1. はじめに

筆者は、教員志望学生が算数教育実践について、教育実習前と教育実習後で変化を調べたところ、授業構成の考え方などに実習前と実習後でかなり変化することを見出すことができた¹⁾。

教育実習は、実施時期は異なっても、教員養成の中では従来から重要な位置づけがなされている²⁾。

本研究は、昨年³⁾の研究と同じ方法で、特定教科に限定することなく、教育実習そのものへの学生の意識を、教育実習の前後で比較検討することを試みた。教育学部の教員免許状の取得を卒業要件とされていないコースの学生で、教員免許状の取得を希望する者は、入学後何らかの動機や目的意識をもつきっかけがあったと思われる。これらの学生は、入学時においては、教職への強い進路希望をもっていたと思われぬ。しかし昨年の結果から、これらの学生が、教育実習を経験することにより教育実習への意識が肯定的に変化する学生が多いことがわかった。

本年度も、教育実習の事前指導で、これらの学生たちに、事前の調査を行い、事後の調査用紙は教育実習直後に記入して筆者に提出するように求めた。

教員養成コースを志望して入学してくる学生は、入学時において教職志望意識が強いと思われ、また自ら教員への適性についても肯定的な意識をもって場合が多いと思われる。

本稿では、教員養成コースでない学生が教育実習を経験することにより、教員への適性や教職志望意識が肯定的に変化する学生が多いという昨年の結果が本年も同様であるかについて考察したい。

2. 研究の目的

教員免許取得を卒業要件となっていないコースの学生のうち、教員免許取得を希望し、教育実習を行う学生に対して、教育実習前と教育実習後において、教育実習への楽しさ、教育実習への意欲、教育実習の重要性、教育実習への不安、教員への適性、教職への志望、の各々の意識の変化を調べる

3. 研究の方法

(1) 調査対象と調査の方法

和歌山大学教育学部の総合科学課程（教員免許取得が卒業要件となっていない）の学生で、中学校の教員免許の取得を希望している4年生の教育実習生を対象とした。筆者がこれらの学生に、事前指導の講話時（1998年5月）に実習前用調査用紙に記入させ、その際に実習後用の調査用紙を配布し、実習後に提出するように指示した。

実習前の調査用紙と実習後の調査用紙の両方がそろった実習生は14名であり、これらの学生のデータを分析の対象とした。なお、これらの学生は、教員養成課程でないため、出身校または出身地の近隣学校の公立中学校（若干名高校）で教育実習を行った。

(2) 調査の内容項目について

1) 教育実習の事前での調査項目

教育実習は楽しいであろう と思う	7 6 5 4 3 2 1 └──────────┘	教育実習は楽しいであろう と思わない
教育実習に意欲的に取り組 みたいと思っている	7 6 5 4 3 2 1 └──────────┘	教育実習に意欲的に取り組 みたいと思っていない
教育実習は、自分にとって 大切な学問であると思っ ている	7 6 5 4 3 2 1 └──────────┘	教育実習は、自分にとって 大切な期間であると思っ ていない
教育実習を行うことに不安 を感じている	7 6 5 4 3 2 1 └──────────┘	教育実習を行うことに不安 を感じていない
自分は教師に適していると思 う	7 6 5 4 3 2 1 └──────────┘	自分は教師に適していると思 われない
自分は教師を職業にしたい と願っている	7 6 5 4 3 2 1 └──────────┘	自分は教師を職業にしたい と思っていない

2) 教育実習の事後での調査項目

教育実習はとても楽しかった	7 6 5 4 3 2 1	教育実習はまったく楽しなかった
教育実習に意欲的に取り組むことができた	7 6 5 4 3 2 1	教育実習に意欲的に取り組むことができなかった
教育実習は、自分にとって大切な期間となった	7 6 5 4 3 2 1	教育実習は、自分にとって大切な期間ではなかった
教育実習中常に不安を感じていた	7 6 5 4 3 2 1	教育実習中不安を感じることはなかった
自分は教師に適していると思う	7 6 5 4 3 2 1	自分は教師に適していると思わない
自分は教師を職業にしたいと願っている	7 6 5 4 3 2 1	自分は教師を職業にしたいと思っていない

4. 結果と考察 (その1)

不安に関する項目以外は7点方向すなわち左方向ほど肯定的反応であると解釈できる。図1は、教育実習前と教育実習後における調査項目への反応の平均値を図に表したものである。

教育実習後では、教育実習前に比べて、教育実習は楽しいという意識が向上し、また教育実習は自分にとって大切な期間であったという意識も向上している。これらは昨年以上の向上であった。

教育実習への意欲については、昨年はほとんど変化はなかったが、本年度はわずかながら向上していた。実習前と実習後ともに数値が高く望ましい結果であると思われる。

不安感については、教育実習前には不安を感じていたが、教育実習を行っていく中で不安感が

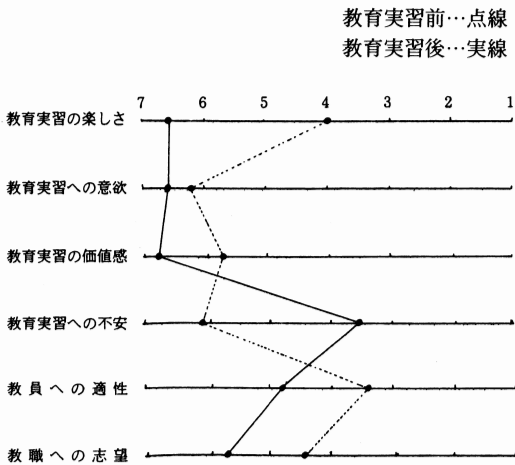


図1 教育実習前と教育実習後の尺度値の平均値 (1998年度)

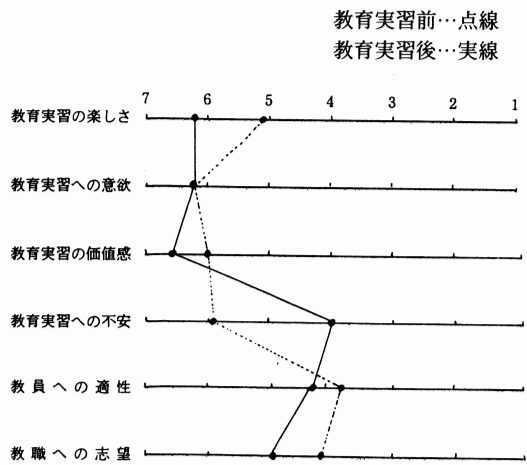


図2 教育実習前と教育実習後の尺度値の平均値 (1997年度)

序々に減少していったと思われる。これも昨年と同様の結果である。

また、教師への適性や教職への志望に関する項目でも、昨年の結果と同様に、教育実習後の方が平均値が上昇している。これは、教育実習を行うことにより、自らの教師への適性への曖昧な気持ちだが、適性への確信をもつように変化した実習生が増え、教育実習を行うことで、教職を志望するという意識が高まることを示していると思われる。

全体的にみて、教師への適性や教職志望については、個人により上昇の大きさは異なると思われるが、教育実習の楽しさは、実習前に比べて実習後は高い得点に上昇しており、教育実習の効果であると思われる。また、不安感については、ほとんどの学生が実習を行う中で減少していく傾向にあり、指導教諭の配慮をうかがうことができる。

5. 結果と考察（その2）

表1は、14人の実習生（教員免許状取得を卒業要件でない）の各項目についての7点尺度の数値を表にしたものである。

教育実習後の教員志望の値では、実習生(ア)(イ)(ウ)(エ)(オ)(カ)(キ)(ク)(ケ)(コ)はいずれも教員志望に肯定的反応を示している。その中でも、実習生(ア)(イ)(ウ)(エ)(オ)(カ)(キ)は強く教員を志望しており、教育実習の楽しさへの意識も向上しているため、今後教職への道を目指していくことと思われる。特に実習生(キ)の向上は著しい。

実習生(ク)(ケ)(コ)については、教職志望への意識の値は大きくないが、実習前に比べると肯定的に向上している。これらの実習生は、実習を行っている中で、自らの教員への適性気づき、教職へ

表1 教育実習前と教育実習後の尺度値の平均値

実習生	教科	府県	楽しさ		意欲		重要性		不安		教員への適性		教員志望	
			前	後	前	後	前	後	前	後	前	後		
(ア)	英語	和歌山	5	7	7	7	6	7	6	2	4	7	7	7
(イ)	英語	奈良	5	6	7	7	7	7	1	5	4	4	7	7
(ウ)	理科	大阪	7	7	7	7	6	7	7	2	6	6	6	7
(エ)	英語	兵庫	3	6	7	6	7	7	7	6	4	6	7	7
(オ)	社会	和歌山	5	7	6	7	7	7	5	3	5	6	5	7
(カ)	社会	和歌山	5	6	7	7	6	6	6	5	4	4	5	7
(キ)	保体	大阪	1	7	7	7	4	7	7	4	1	4	2	7
(ク)	英語	宮崎	4	7	6	6	6	7	7	5	5	5	4	6
(ケ)	英語	大阪	4	6	7	7	7	7	7	4	3	5	3	6
(コ)	数学	和歌山	3	7	5	6	2	7	7	2	2	4	3	5
(サ)	英語	和歌山	4	6	5	6	4	6	6	2	2	4	2	4
(シ)	英語	愛知	4	7	7	7	7	7	7	4	3	6	4	4
(ス)	英語	兵庫	5	7	6	7	6	7	6	3	4	4	3	4
(セ)	国語	大阪	3	5	4	5	5	5	6	5	2	3	3	3

*「教科」は中学校で担当した実習教科、「府県」は実習校の所在府県、「前」は教育実習前、「後」は教育実習後を示す。

の志望が向上したと思われる。

実習生(甲)(シ)(ス)は、教育実習の楽しさを実習前よりも強く感じながらも、教職志望については迷っていると思われる。しかし、教員への適性については、実習後には4以上であり、教職を志望する可能性をもち備えていると思われる。

実習生(乙)は、教職志望に対して否定的傾向を示している。しかし、教育実習の楽しさ、教育実習への意欲については向上しており、不安も減少している。教員への適性や教職への志望も3であることから、今後教職を志望することもありうると思われる。

教育実習の重要性への意識は、ほとんどの実習生が、実習の前後とも、肯定的に高い意識をもっていった。これは昨年と同様である。教育実習への不安については、昨年は高低に加えて実習前後での変化も個人により様々であったが、本年度の実習生のほとんどは減少しており、実習を行っていくうちに自信を深めていく学生が多かったと思われる。

6. おわりに

教育実習の前後の変化についての意識調査から、実習後は、実習前よりも、教育実習は楽しいと感じ、意欲的に取り組むことができたという実習生が多かったことが昨年と同様に確認することができた。

本稿で扱った調査対象は、教員免許を必要としないコースの学生であり、大学入学時では教職に対してそれほど強い意識をもっていなかったかもしれない。しかし、教員免許状取得を希望するにあたり、その過程としての教育実習を経験することで、自らの教員への適性を見出すことができた学生や、教職への志望を強く感じるようになった学生がいることが確認できた。

特に、実習後に教職志望をより強くする学生も少なくなく、これらの学生は今後教職への道を目指すであろうと思われる。

引用・参考文献

- 1) 今井敏博,佐藤省吾,鈴木英樹,旅田利枝子,三木勇次,「教育実習生の実習前と実習後における算数の指導理念の変容について」, 和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要, No.3, pp.1-11, 1994.
- 2) 教育実習指導研究会編,『教育実習指導資料』, 表現社, pp.39-42, 1969.
- 3) 今井敏博,「教育実習生の実習の前後における実習への意識の変化について —教員免許状取得が卒業要件となっていないコースの学生について—」, 和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要, No.8, pp.125-130, 1998.